

ムスタン紀行　ローマントンにて（三）　仲　紀久郎

平成二十六年八月六日

本日はローマントン最後の一日、チョーセルゴンパてふ僧院にて倍音聲明の締括りをなす豫定なり。されど送迎車輛現れず。法事有りてジープ皆出拂へりとの事なり。出発を午後に変更するも車の確保能はず。止むを得ず代案にてムスタン川支流の洞窟に向ふ。川岸の崖にはボン教の時代より修行に使用されし洞窟多數有りとの事なり。

街中を出づるや一面の菜の花畑と蕎麥畑なり。彼方の岩山を望みつつ細き畔道を行く。鮮かに咲く菜の花、地味乍ら可憐なる蕎麥の花に挟まれ行く。暫くは道の態を成すもその内小徑は用水路の土手となり、幅は愈々狭まりて、進むほどに靴を濡らしつ。

耕作地を抜け荒地を登りつ下りつ餘程の距離を歩き、やうやく河岸に到達す。崖の下に洞窟あり。同行十数人辛らうじて入る事可能なる廣さなり。早速倍音聲明行ふ。實に氣分良し。時間の感覺減卻す。洞窟の上なる危ふき岩上にN師坐し瞑想なされたり。

更に川上へ行かばボン教廢寺趾の洞窟有りとのこと。河原を上流へと進む。丸太の橋を渡り暫く行けば、プール状の水溜あり。ガイド、手を浸け我らを促す。温泉なり。

目當ての洞窟、川の合流點の向うに見ゆるものの、水深く渡河不能なり。其處は諦むるも、支流の對岸に大きき形共通當と見受けらるる洞あり、早速先遣隊の向ひたれば、此方は渡河可能、近づく事可なりと。皆其方に向ふ。此處に至る迄も路平坦ならざれば同行者數幾分減少したり。此洞窟にての倍音聲明、恍惚の感有り。N師も大層御氣に召されたる御様子なり。同行のカメラマン氏の前にてヨーガのポーズを取られたり。來年の修行場アーシラムは此の地にならんや。當初豫定のゴンパには行けずとも眞に有意義なる一日となれり。

（平成二十七年六月十一日受附）